

# Mariko Sakai

## 坂井眞理子展 いのちの色、いのちのかたち

62年前、一生描き続けると決めた少女は  
—— 単身ニューヨークへ発った ——



坂井眞理子  
撮影：安藤信

坂井眞理子(1940-)は、中学・高校時代を宇部市で育った山口県ゆかりの画家です。1958年に女子美術大学へ進学、大学3年生の時にアメリカ抽象表現主義の画家とその作品を知り、ニューヨーク留学を決意。卒業後間もない1962年夏、単身渡米してブルックリンミュージアムアートスクールで研鑽を積みました。2年後、半年をかけてヨーロッパおよびエジプトを旅し、各地の美術館を訪れるなどして帰国。その後結婚し、出産や育児と向き合う間も、挿絵等の依頼を請け負い制作を続け、1975年に開催した個展(新橋、第七画廊)で10年ぶりに大作を発表して以来、国内外における継続的な個展の開催のほか、画家として精力的に活動を続けてきました。本展では、画家・坂井眞理子のニューヨーク留学時代の作品から、近年の大作にいたるまで、その画業をたどります。鮮やかな色彩に満ちた絵画世界をどうぞお楽しみください。

### 関連イベント

#### ◎作家による ギャラリートーク

画家・坂井眞理子さんに、  
自作について  
お話しいただきます。

[日時]  
2024年11月30日(土)  
14:00~(45分程度)  
※事前申し込み不要

#### ◎トークイベント 坂井眞理子×谷川渥 「坂井眞理子あるいは無垢性の絵画」

多方面にわたる批評活動と、  
独自の視点による美学で知られる、谷川渥氏。  
画家・坂井眞理子の画業をよく知るお一人でもあります。  
画家が、親交のある美学者とあためて語るトークイベント。

[講師] 坂井眞理子(画家)・谷川渥(美学者)  
[日時] 2024年12月14日(土) 14:00~15:30  
[会場] 山口県立美術館 講座室  
※事前申し込み不要(当日先着順) / 聴講無料

#### ◎関連展示「坂井眞理子素描展」

坂井眞理子の素描を、  
美術館を飛び出して街中でご紹介します。

[日時] 2024年11月22日(金)~12月22日(日)  
※上記期間内の木・金・土・日のみOPEN  
11:00~18:00

[会場] HEART SPOT 102  
山口市米屋町商店街内  
山口銀行米屋町出張所前

## 坂井眞理子展 いのちの色、いのちのかたち

2024.11.22 fri — 2025.1.26 sun

[開館時間] 9:00~17:00(入場は16:30まで)  
[休館日] 月曜日 ※ただし12月2日・1月6日[ファーストマンデー]、1月13日(月・祝)は開館  
年末の休館は12月26日(木)~1月5日(日)

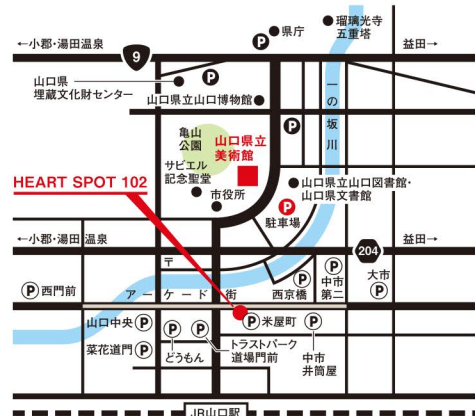
[観覧料] 一般500(400)円 / シニア・学生400(300)円  
※シニアは70歳以上の方、( )内は20名以上の団体料金。  
※高等学校、中等教育学校、特別支援学校に在籍の方等は無料。  
※障害者手帳等をご持参の方とその介護の方1名は無料。

[主催] ミュージアム・タウン・ヤマガチ実行委員会

18歳以下  
無料

### 【交通案内】

JR新山口駅から山口線に乗り換え山口駅下車、徒歩約15分  
JR新山口駅から防長バス山口行きで約30分  
JR防府駅からJRバス山口行きで約1時間  
[山陽自動車道] 防府東ICから車で約25分  
[中国自動車道] (広島方面から)山口ICから車で約15分  
[中国自動車道] (九州方面から)小郡ICから車で約25分  
※駐車場は美術館周辺の各駐車場をご利用ください。  
● 駐車場は無料。(200台)  
● Pは無料。● Pは最初の1時間のみ無料となります。  
(1時間無料券を配布しますので駐車券をお持ちください。)  
県庁駐車場は土・日曜、祝日のみ開放となります。



## 山口県立美術館

〒753-0089 山口市亀山町3-1 tel.083-925-7788  
https://y-pam.jp

2024.  
11.22 fri — 2025.  
1.26 sun

山口県立美術館



60年以上にわたり、色とかたちにこだわって作品を展開してきた画家・坂井眞理子さん(1940-)。絵を描くことが大好きな少女がいかにして画家として歩んできたのか。お話をうかがいました。

— もともと描くことが好きだったとか。

記憶にある最初の絵は、小学1年の時の、一面黄金色の中で稲刈りをする人々を描いたクレヨン画。額装されて教員室の正面に飾られたのが晴れがましかった。母は兄弟全員に絵を習わせてくれたけれど、続いたのは私だけ。中学・高校では美術部に入って、大学は女子美術大学に行きました。

## 「お嫁に行くのが一番幸せじゃ」

— 宇部の画家、松田正平さん(1913-2004)との交流はその頃から?

大学に入ったら、何のために描くのかわからなくなって。先輩の助言もあって、先生を訪ねたの。画廊で作品を観た事はあったけれど、お会いするのは初めてでした。そしたら、「あんたはいろいろ考える頭のいい人らしい。頭のいい人は絵描きにはもっていない。弁護士にでもなるがいい。そうじゃなかったらお嫁に行くのが一番幸せじゃ。」なんて言われて。段々腹が立って、何がなんでも画家になってやると思いましたね。それ以来です。「あんたの絵はわからん」とも言われたけれど、後年になって「山口出身の女流画家で世に出たものはなかなかいない。あんたが、世に出なさい」なんて励ましてくださったのは嬉しかったわ。

## 「今から現代美術を志す者は絶対にニューヨークに行くべきだ」

— その「わからん」坂井さんの絵、美術史的にはいわゆる「抽象」絵画ですが、このような表現に至ったきっかけは?

高校の時に、宇部市渡辺翁記念会館に巡回してきた第三回日本国際美術展を観て、初めて生で見た抽象の作品に感動したの。具象に比べて大胆で自由に面白くてね。自分もこんな風に、目の前に実在する形にとらわれないで、新しい形や色をつくり出す、そんな絵を描きたいと思いました。大学に入っても、リングや人を写実で描くとか、具象で描かされることにずっと違和感があったのよね。

— そして留学を目指されることになった?

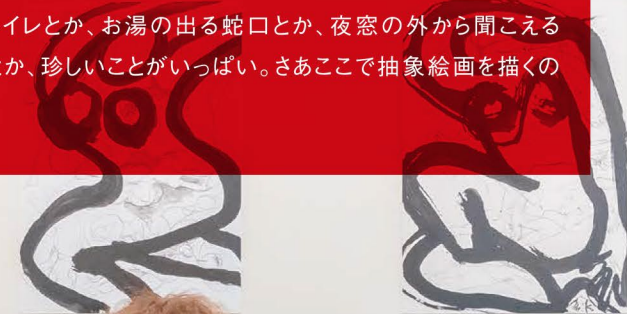
大学3年の時の文化祭で、美術評論家、東野芳明さん(1930-2005)が、ポロックとかデ・クーニングとか、ニューヨークで見てきたばかりのアメリカ抽象表現主義の画家と作品を紹介される講演を聞いたの。それが頭を離れなくて。今から美術を志す者は絶対にニューヨークに行くべきだと思います。それで奨学金が出る学校を調べて、大学の教授に推薦状のため現地の日本人画家を紹介していただいたり、パスポートをとったり、準備を進めました。反対されるに違いないと思ったから、親には事後承諾でした。

— ご家族の反応は。

母は卒倒しそうになっていたわ。でも父が「女性といえどもやりたい事があるなら、やらせてやろう」と言ってくれたの。出発当日、羽田に見送りに来てくれた兄には、「お袋は寝込んでしまったぞ。でもがんばれよ」と言われました。

— 1962年の夏のことですね。1ドル360円、J・F・ケネディ大統領時代のニューヨークはいかがでしたか。

水洗トイレとか、お湯の出る蛇口とか、夜窓の外から聞こえる銃声とか、珍しいことがいっぱい。さあここで抽象絵画を描くの



Mariko Sakai

だと意気込んで。でももう時代は抽象表現主義ではなくなっていてね。どこの画廊にもポップ・アートがあふれていた。ニューヨークへ行けば抽象表現主義の作品が見られると思っていたのがっかりよ。ただ、ポップ・アートは好きではなかったけれど、明るくてあっけらかんとしていて、芸術とはかくも自由に解放されていいのだと心も開放されて、私も一生画家でやっていくのだと決めました。

YMCAの宿舎に半年いた後、荒川修作さん(1936-2010)の紹介で広いロフトを借りられることになったのだけど、バスタブもシャワーもないし、隙間風が吹き込むような所だったの。でも絵が描ければよかったからその酷さもたいして気にならなくて。大きな作品が自由に描けることが本当に嬉しかった。

## 画家として

— 2年間研鑽を積み帰国されて、その後は?

個展を2回開いたけど、すぐに結婚、出産、育児で油彩どころではなくなりました。ニューヨークで自由な空気を吸ったから、日本の保守的な風潮にも困惑するばかりで。結婚って、自分の生きる社会だけでなく、夫、子供の生きる社会ともいかに上手に付き合うかということでしょう。描くことのために生きていたのが一変して、大変でした。幸い本や雑誌などのイラストや、装丁の仕事のイラストを、なんとかフラストレーションを解消していましたね。ようやく1975年に、第七画廊で十年ぶりの個展を開くことができました。

— 以来、国内外で個展やグループ展を開催されるなど、画家として活動されてきたわけですね。

## 根っからカラリスト

— 坂井さんの作品の特徴は色、ですね。

できたら色だけで絵を描きたいほどに色が好き。小学校時代、当時の自宅近くに海やミカン畑があって。真っ赤でまん丸い日の出の太陽とか、輝く海と空の青色とか、木々の緑、ミカンのオレンジ色とか、自然の原色に囲まれていました。なかでも好きなのは赤。カドミウム・レッド・パープルね。コロナでみんな自粛していた頃に、色を使う気がなくて、墨で素描をやった黒の良さも感じました。けれどやっぱり色は最高!

— 今回の展覧会では、坂井さんの色彩をたっぷり味わっていただけるはずですよ。是非とも楽しみにしていただきたいですね。



《無題》  
1964年  
油彩/カンヴァス  
撮影:竹見良二



《火焰の風》  
1993年  
油彩/カンヴァス  
撮影:竹見良二



《大地がざわめく》  
2009年  
油彩/カンヴァス



《女神になった母—母と私》  
2015年  
油彩/カンヴァス



《ニューヨークに住んだ》  
2022年  
油彩/カンヴァス